慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	留年学生に対する一視点 : 全学生対象のアンケート調査から
Sub Title	An angle on the repeaters
Author	小川, 芳子(Ogawa, Yoshiko)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1978
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.23 (1978.) ,p.81- 91
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	原報
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000023-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

共立薬科大学
Annu. Rep. Kyoritsu
Coll. Pharm.

留年学生に対する一視点 ―全学生対象のアンケート調査から―

小　川　芳　子

An Angle on the Repeaters

YOSHIKO OGAWA

(Received September 30, 1978)

Also in our Kyoritsu College of Pharmacy, some repeaters or students remaining in the same class tend to stay longer, though they form only a very small percentage of all the repeaters. They show typically one of the features of student apathy and, as such, try to ascertain or think over "what they are". They want, in other words, to find out their self-identity and this tendency is commonly seen also in our ordinary students. From this angle we analysed the results of our questionnaire to the students and could draw two conclusions as follows.

First, the answers of our students tell clearly that the person who meets their ideal image, which is strongly concerned with their self-image or self-identity, is one who acts as a subjective agent and has consideration for others and that the abler he is, the better they find him. They seek for such an ideal image in the person relatively close to them in the order of a friend, an acquintance and a parent. In many cases, however, if they choose among the people close to them an ideal person they set up in themselves as a patron of their identity, they must feel too strong pressure from him and the fixation tend consequently to become difficult.

Second, the tendency of the families to nuclear ones and the increase of the families under tender fathers and strict mothers compell them to find it difficult to secure a sense of stability under their mothers. This leads them to seek for a sense of stability in their fellow-consciousness with their friends, so that it is definitely important to them whether or not they have friends, for it determines whether or not they fall into a state of apathy.

1. はじめに

全国の4年制大学について，留年者の調査結果が，本年5月31月日付の新聞*[1]に掲載された。これによると，本年3月のストレート卒業者は，国立80.8%，公立78.7%，私立74.0%で平均76.4%，5年前（昭和48年）当時より確実に増えながら安定してしまった形である。

このように増加安定してしまった留年に対して，大学によっては対応策を講じたり，何故かを考える機会が多くなっていることは事実であろう。

本学での留年率は他大学から比べれば非常に少い，ストレート卒業者が90%以下になったことはないが，存在することは事実であり，1回の留年ではなく，2度，3度と長期留年の傾向が僅か

1）朝日新聞　S53. 5・31　「留年4人に1人が定着」

であるが増えている。

2年前に留年要因として考えた*2社会的属性からの再検討も含め，何故このような留年現象が増えつつあるのかを，本学の学生全体にアンケート調査を行った資料を中心に，学生全体が求める理想像，家庭環境などを通して留年群について考察をする。

2. 留年者の実数

9単位以上の未了単位で留年という制度となった昭和45年度以後の留年者実数は表1のとおりである。

(　)内の人数は再留年者数であり．再留年の割合がわずかであるが増加している。

尚卒業延期ととなる場合も留年中に含めなければならないだろうが．この場合は1単位未了でも延期となるが，半年間の仮卒業として別扱いとし，在学生と一諸に授業を受けることはないので今回は実数として加えていないが毎年数名はこの扱いを受け本来なら留年者数に加えるべきであろうから，次回再検討のつもりである。

在学生は全学年略850名中，留年経験者は50名前後，4年間のストレート卒業者の割合が90%を下ったことはない．。

留年者実数

	1年次	2年次	3年次	計	再留年率
昭和45年	0人	3人	1人	4人	0%
46	5(1)	6	3(2)	14(3)	21.4
47	7	5	8(4)	20(4)	20.0
48	5	3(1)	8(4)	16(5)	31.2
49	7	6	6(1)	19(1)	5.2
50	8	2	6(3)	16(3)	18.8
51	6	5(2)	12(5)	23(7)	30.4
52	5(2)	2(1)	10(4)	17(7)	41.2

(　)内数は2度以上の再留年者数，休学は含まない

表1

3. 他大学の対策

留年の問題は学生個人がひき起すものであっても，その原因はやはり各大学ごとに違うものであり，大学側からの検討を抜きにして論ずることは出来ないという立場から，対応策が考えられるようになった。例えば*3,

慶　応　大　学
東　海　大　学　} 同学年2度以上は退学，プレゼミナール形式の授業

駒　沢　大　学　夏季補講で単位を取得させる。

2）小川芳子「留年学生に対する臨床的考察」共立薬大研究年報　Vol.21　1976　P82～93
3）朝日新聞　「いま教育は―留年」　S53. 5.31～6.2

No.23 (1978)

札幌商大
九州共立大 } カリキュラムの改善と勉強法の個人的指導

三重大
立命館大 } 面接指導の強化

国際キリスト教大　傾斜学費制度（年々授業料を値上げ）

筑波大学
長岡技術科学大 } 在学年数最高6年

豊橋技術科学大　在学年数最高5年

これらの大学側の努力は，それなりに実っているようである。例えば東海大学の場合，3割*4以上であった再留年率が，1割以下に減少しているという。

大学側にこのような検討をせまらせた原因としては，入試成績と留年率に相関が見られることや*5，工学部系は門戸拡大で定員増加した分だけ学力低下が見られるなど，学力的な面で指導強化が望ましいとの結論が出てきた学校が多いようである。

能力面で指導することが不要とは云えないが，他からの働きかけによらず自らの力で大学生活を乗り切るなり，退学する道を選択するなり自己実現への過程としての大学生活を送るためには，無気力な留年生活を繰り返えさずにすむ様，何故そうなるのか，社会的な観点から再度留年生を見つめることも必要であろう。

4. student apathy の特徴

京都大学*6の調査では，留年1年目で精神科の診察治療を受けたのは9.5%，2年以上の長期留年者では21.9%であった。長期留年者の受診率は確かに高くなっている。医学書公認のノイローゼであれば，ほぼ例外なく自分から第3者に助けを求めにやってくるのであり，医師の方が大丈夫といっても本人はまたしても不安になり医師を訪ねざるを得ない。いわゆる病識，病覚が高まっている。それがノイローゼの1つの特徴的な行動様式である。

長期留年者の受診率が高くなっているとはいえ，第3者によって医師のもとへ連れてこられることの方が多く，彼らと治療関係を保持し続けることはことの他難しい。彼らの無気力は学園紛争以来からすでに始まっており，決して殆んど，予想されるようにはじめから敗残者ではない。彼らは現状を抜け出そうとする積極的努力をほとんど示さない。自ら治療を求めるでもなく，さりとて退学して新しい人生を求めるというのでもない。

これらの一群を日本では最初丸井教授（1968）*7により大学生のノイローゼ，意欲減退症候群として取り上げられたが，アメリカのウオルターズ（1961）は student apathy という言葉でこうした学生の事例を記載している。その後，笠原教授の「青年期」*8でかなり一般化した学生群として紹介されるようになった。

この「青年期」の中に述べられている student apathy の特徴は次の通りである。

4）留年，その生態と挑戦，東海大学学生々活研究所，東海大学出版会
5）③と同じ　S53. 6. 6
6）③と同じ　S53. 6. 7
7）土川隆史「留年の心理とその対応」厚生補導　Vol. 144　6-1978　P22～33
8）笠原　嘉「青年期」中公新書　P87～97

1．好発期は青年期後半。
2．男性のノイローゼ，或は男性に互して競争出来る女性。
3．努力型の真面目人間の無気力という逆説かつて黄金時代を持ったことのある人。
4．強迫的完全主義的性格傾向の持主。
5．優越者を近親中にもつこと。
6．正業を選択的に忌避すること。
7．オリズム，あるいは優勝劣敗への過敏さ。
8．自分とは何かを自問し，迷いidentityが不確かである。
9．成人への接近に恐れがある。
10．ある種のやさしさ志向をもつ。
11．その予後はさまざまであること。
数ヶ月のうちに"やる気"が出てなんとなく戦列に復帰してしまう平均範囲の人，2，3年という時間を要してもよい友人や先輩や治療者にめぐりあい，新しい自己表現をする好運にめぐまれる人もあり，悲劇的結果に終る人もある。

以上の様な特徴を考えて，薬学という立場の本学々生をみると，女性でありながら男性と互し働ける環境が用意されている彼女達の，留年率が高くなってきているのもうなずけるといえようか。

一方，入試の難しさは，過去に勉強面で黄金時代を持ったことがない者には通過しえない高度さが要求される。従って努力型の真面目人間が自然多くなっていることも当然であろう。

因に，自分自身の意識する性格を全学生を対照のアンケート調査からみると，次の結果であり，自らまじめな努力型を自負している人の多いのがわかる。

几帳面・まじめ・努力型	23.7%
孤　独・内向的・劣等感	17.8%
神経質・自信欠乏・弱　気	16.3%
外向的・攻撃的・陽　気	26.7%
自己顕示・虚栄的・勝　気	15.4%

浪人して入学してくる学生の割合も年々増加している。

	4年	3年	2年	1年
浪人経験有	20.8%	28.4%	33.1%	39.4%

アパシーの特徴の中で優越者を近親中に持つこと，自分とは一体何かに迷う一群であるとのことを具体的に実証するため，一般学生との差なども知りたくアンケート結果から次章で考察する。

5. 女子学生の理想像

自己とは何かを考える一群である，との特徴をとらえるのにま"ず"自己がめざす理想像はどのようなものかを知るべく次のようなアンケートを全学年に行った。

アンケート

・あなたが素晴しい人だ，優れた人だと思うのはどんな人ですか。[　　]
・そういう方があなたの身近かにいらっしゃいますか。[1．はい　2．いいえ]
・1に○をつけられた方，それは下のどなたですか。

1．友達	2．親	3．兄弟	4．先輩	5．親戚
6．知人	7．現代の日本人	8．現代の外国人		
9．歴史上の人物		1～6を除く		10．その他

この調査の結果，素晴しい人が身近かにいるかどうかは次の通りであった。

	1年	2年	3年	4年
い　る	60.6%	50.3%	43.3%	42.3%
いない	27.8%	32.7%	35.3%	31.9%

学年が進むに従い理想像を描くことが困難になるのであろうか，“いる”に対する人数は減少するのに“いない”がそれ程増加していない。本心ではいろいろ考えているがアンケートに答えるのは面倒或は適当な言葉が想いつかず無解答が増えたのではなかろうか。

次に素晴しいといわれるのは学年間に顕著な差はなく，1．友達，2．知人，3．親，4．先輩，5．現代の日本人，の順で選ばれている。これに対し兄弟，歴史上の人物は非常に少なかった。兄弟が少ないのは頷けるが，歴史上の人物が選ばれないのは，現代青年の近視眼的傾向として大きな特徴だと思われる。

性別に対しては特に同性を選んでいるわけではないようである。

素晴しいとする人物像は，学年間に差程の違いを感じなかったため，解答率の高かった。1年生のを集計，表2にまとめた。

表2　女子大生の理想像

①　主体性	72
自分の信念を持つ人	38
人生に目的を持って努力する人	11
何ごとも真けんに取りくむ人	8
自分の道を模索して進む人	2
1つのことを生涯やりとおす人	2
人生をまじめに考える人	1
夢を現実に出来る人	2
どんな時にも自分を向上させようと努める人	1
自分の人生に目的を持つ人	2
野心をもって頑張っている人	1
1つの心情を大切に自分なりに持っていられる人	1
人生に情熱を持って生きる人	1
自分を見つめて生きる人	1
自分に正直な人	1
②　優しさ（依存性）	55
思いやりがあり他人の心を尊重する人	18
相手の立場を理解しょうとする人	6
ひろい心の人	5
自分に厳しく他人に優しい人	5
優しい人	6
明るい人	3

人間的で暖かい人	2
外面はやさしく柔和，内面は強い人	1
間違いを素直に認める人	1
自己を知っている，正義感のある	1
厚みのある，思想的に共感できる	1
道端の花にも心を配れる	1
いざという時頼れる，感受性の強い	1

③ 能　力	35
頭がよい．スマートに物事を処理	5
知識の豊富な人	5
判断力のある人	3
上品で社交的教養がある	2
大物の風格のある人	2
ユーモアのある人	2
きれいな人	2
行動力のある人	2
個性的な人，統率力のある人	1
何事にも落着いた人，常識のある人	1
人を自然に楽しませてくれる人	1
自分の持たないものを持っている人	1
自分の才能を十分にのばしている人	1
物ごとを違った角度から余裕を持って見られる人，趣味が多い人	1
話し上手な人，実力のある人	1

④ 奉仕の精神	7
人のためになる高い理想を持ち実務手腕を持つ	3
他者への愛，奉仕の人	1
人類友好世界平和のために他の人の幸福を願える人	1

⑤ 仕　事	4
生活力のある人	1
仕事を立派にはたしている人	2
女性でも男性に互して仕事をするが女性らしさもある人	1

⑥ モデル型	8
両親のような人	3
母親のような人	2
キューリー夫人のような人	2
新しい発見をするような人	1

⑦ その他	2
敬神心のある人	1
苦労している人	1

この結果の大きな特徴は精神的な面での願望がいかに強いかであろう。反面から見ればこの集団が経済面でいかに恵まれているかを証明しているともいえよう。仕事に理想を求めてもそれは経済的な理由からだけではなく，生きがいとしての生活，仕事を求めている。とはいえ夢を追い求めているのではなく，これが本学々生の着実な願望であり，まとめると，『自分をよく知り主体的な行動がとれ，思いやりのある優しい人で，能力的に優れていれば尚よい』という理想像を持っているようだ。

思いやりのあるということは，自分自身の中に残る依存性，甘えの強さであろう。母性本能として甘えさせたいという気持もないとはいえないが，一般的にそれ程成熟した女性像を見るより，依存性の強い幼児性の残存する学生群を見ることの方が多いように思われる。

このような理想像を自己の中にどのように統合して自己像に近ずけてゆく努力が出来るかどうかがアパシーへの道をたどる別れ道となるのではなかろうか。

E. H. Erikson*9 のいう青年期の特徴を引用してみる。

『青年期は生まれて始めてアイデンティティを形成しょうとする。

自分が感じる自分の姿よりは，他人の眼に写った自分の姿の方に心を奪われる。そしてかつて習得した役割や技能と，その時代の理想像とをいかに結びつけるかが問題となる。彼らは新たな連続性感や同一性感を探求するが，それがいまや，性的成熟をその中に包摂しているものでなければならない。又それらを探求する際に，何人かの青年は恒久的な偶像や理想像を最終的なアイデンティティの保護者として設置する前に，かってのもろもろの危機をもう一度しっかり支配しなければならない。彼らが，就中必要とするものはアイデンティティのさまざまな構成要因を統合するためのモラトリアムである。児童期の世界にとって変るものはその輪郭が，漠然としていて要求するものは極めて直接的な，一つのより大きな単位，即「社会」である。

これらの構成要因を再検討してみることも，青年が直面する問題の一つなのである』

依存性の残る青年層に，性的なものを包摂し，最分化され巨大に見えるであろう社会を考え，アイデンティティを形成しなければならない時，理想像をあまりま近かに求めることはどのようなものであろうか。近いことは善悪両面において圧力がかかり過ぎ，自己の中に固定させることは難しいのではなかろうか。

学生の中に例を取ると，留年する学生達の中には，自分も親の様になりたいとする希望と，親は何であのような能力があるのだろうという自己の不全感，何のために自分は親と同じ道を歩まねばならないのか，両価的な気持に押しつぶされ，自己を失ってしまい留年することがままあるようだ。

東北大の黒田氏*10も，どのタイプの留年でも根底には「自分とは何か」位置ずけ出来ずに迷っている状態がある。受験技術教育一辺倒で人生論を抑圧する高校教育とその背後の学歴社会に原因がある。その対応策としてそういう社会的価値観を転換させるまでの過渡的対策として，転学転部の許可，2/3の学生が学部選択を間違っているとまでいいきっている。

東京女子大のアンケート調査*11でも学科選択の曖昧さが指摘されている。

恒久的なアイデンティティを形成するために，もろもろの危機を支配しなおす為，一時それらの理想像を捨て去ろうとした場合，身近かな親との依存関係がはっきりしたものでなければ自分自身の存在感まで失ってしまうのは当然であり，その点について，家庭環境から次章で検討する。

6. 社会病理現象からみる家庭環境

社会的病理現象として，登校拒否，薬物乱用，非行，自殺などがあるが，いずれの現象も孤独でか弱く未熟で自主性の乏しい子供達が自らの孤独や弱さから逃れ，自己実現をはかろうとする点で共通しているが方向が違うのであり，表現の仕方が違うといえるが，規律からの脱却という登校拒否，幻想世界に逃げこむ形の薬物乱用，暗闇における甘えといやがらせという形の暴走族，そして反逆と秩序違反という形の非行であり，今いる現実も現実の別の世界も，幻想世界に

9）E・H・エリクソン，アイデンティ，岩瀬庸理訳，金沢文庫　P167～178

10）黒田正典，③と同じ　S53．6．8

11）浦田まり子，長石真澄「高等教育における教育方法の改革へ向けて」東京女子大学紀要　Vol.29　P165～188

も希望は托されない．そうしたどの世界よりも，死に夢を托そうとする最も徹底した逃避であり，否定でもある自殺への道を歩む子供達の家庭の特色を稲村氏*12は次のようなものであるという。

1．子供の数が少なく核家族が多い
2．時間と金のゆとり
3．子供への過剰な打ちこみ
4．甘やかし
5．過剰な期待と干渉
6．教育への異常な関心
7．受験競争へのかりたて
8．親子の情緒的結合の不足

無気力留年群の人々は，自殺にいたる程，自らの弱さから逃れ自己実現させようという強い欲求を持たない，それは根本的なところでは自己実現の経験があるため，原点に帰って見つめなおす程の努力はしたくない。表層部分のあがきであると思うが，育つ家庭の特徴は同じ土壌の上にある。自殺する子供の家庭の特色として，子供の少ない核家族というのが一番に上げられているが，核家族化というのは親の関心がいやでも1人1人の子供に集中して，大切にし期待し，過保護になる。家族力動が単純で，親の影響が絶大に働くことになる。家族数が多ければ構成員相互の力動が複雑になり，さまざまの緩衝作用を生み出して，子供に対しても，親の影響が単純で直接的な働き方をしなくなる。ところが小人数の家族では親の影響は悪い面など文字通り直接にさけられず力で子供に達してしまう。

受容的な母親によって安定感を得，権威的な父親に反抗することによって，自立の道を見いだしてきたこれまでの家庭環境が，今ではやさしい父親，恐い母親のイメージに逆転しつつあるという。家族そのものの変化に加えて，親の留守になる機会も多く，子供が孤独に陥いる程度は一層強くなっている。

これらの特徴は留年群とか，自殺とかの問題に至る前の，現代の子供が育つ環境そのものであり，本学の学生の調査でも核家族は65％を占め，3人以上の同胞で育ったものは30％にならない。同胞に同性がなく女子1人だけの学生が50％以上である。

母親の有職者は次の通りで少しずつであるが上昇傾向にあるように思われ，子供の孤独化は進行しているといえよう。

	母親有職者
4年生	29.2％
3年生	30.4
2年生	34.5
1年生	33.3

孤独化する生活環境に，金銭的ゆとりがあり，時間のゆとりはないように見える本学の生活空間であるが，忙しさは多分に机上のものであることも多い。

12）稲村　博「子どもの自殺」東京大学出版会　P109～126

友人関係の持てない，家庭に帰っても１人の学生を無理に学校へ連れ戻すだけの力が，学校にあるだろうか。

大学という集団に入り改めて自分はこれでよかったのかを考える情況が生れるともいえる。受験競争の激化は早いうちから進路決定を迫られ，教育熱心な両親の元で手厚く育てられ，少しでも良い成績をとって大学に入ることに疑問も抵抗も覚えず大学生になっている，良い子の学校嫌いという点で，小中学生の登校拒否症と同じ彼らにとって，留年とは遅れてやってきた反抗期として，人間が自立するうえで避けられない過程であるともいえよう。

7. 「生きがい」と友達

ＮＨＫの放送世論調査所の「青年の意識*13」調査から，18～22，23才の青年後期における「生きがい」は趣味，スポーツ，娯楽などと，友達との交際という２つの柱を求めているという。

本学１年生へのアンケート調査で「今一番関心のあることは何ですか」の問に対する結果は次のようなものであた。

趣　　味	35.0%	アルバイト	7.8%
友達関係	31.7%	金銭問題	3.9%
勉　　強	19.4%	娯　　楽	3.9%
スポーツ	15.0%	国家政治問題	2.8%

まさに趣味，スポーツ，娯楽に対して，友達関係に大きな関心を寄せているのがわかる。

生きがいとして重要な位置を占める友達関係について，ＮＨＫの調査から心を打ち明けて話せる友達のない人の割合*14をみると23%である。同年代の諸外国の割合が，スウェーデン・３%，ユーゴスラヴィア・４%，スイス・７%，Ｕ．Ｓ．Ａ．８%，イギリス，西ドイツ・12%，フィリピン・13%，フランス・15%，インド・16%，ブラジル・21%と続くなかで日本は最下位を占めている。友達とのつき合い方が欧米人の自分を失わないで一線を画してつきあうのを違い，裸になってつき合う人間関係観を持つ反面，裏切られての人間不信に陥っていることが多く，友達を求める気持と不信感が両価的に強まっていく傾向もあると思う。

本学の学生が友達に求めるものは，５で述べたように信念があ，自分をやさしく甘えさせてくれる人であり，自己を解放させられる場を望むのである。一時代前の母親であればこれらの欲望に答えられることが多かったが，現代は厳母が多く答えられなくなっている。これを友達に求めるようになる。自然裸のつき合いになるが，母親と違い裏切られることがあるのも当然であり，人間不信からアパシーへの道をたどることにもなる。ただ友達に対する気持は両価的であり，恒久的に孤独の中に閉じこもるというより，一定時間後普通の学生々活に復帰してくることも多いのである。

13）吉田　昇，門脇厚司，児島和人，編「現代青年の意識と行動」ＮＨＫブックス
14）松原治郎「日本青年の意識状況」現代のエスプリ別冊「青年」意識と行動，至文堂　S52. 8　P５～31

8. 「社会的属性からみた留年要因」現1年生からの統計

1昨年留年要因について7つの項目*2を検討した。これを本年度1年生に6項目調査した。

① 自宅外
② 浪人経験有
③ 学校選択自分以外
④ 友達がない
⑤ 同胞関係女の子1人
⑥ 母親有職者

以上の6項目に対し180人の対象者中，

6項とも要因をそろえ持つ人は……1人
5項の要因持つ人は……2人
4項の要因持つ人は……17人

であった。尚要求水準の高さについては，心理テストなどをしなければ出ないので今回ははずした。

留年要因の所持率の全学生の平均は2であったから，3項以上に○がつく場合は要注意といえるが，とりわけ4項以上の20人に留年の確率が高いと思われる。

その他の要因を求めてアパシーの特徴とされることをいろいろ検討してみたが，1対1の面接や心理テストなど意識面での調査なしで客観的状況だけで判断することは困難である。

社会的属性から要因率が高いことが判明した後は，クラス担任，カウンセラーなどその任にあたるものが面接し，理想像，家庭環境，本人の要求水準の程度などを見なおすことが出来れば長期の留年に至らずにすむことが多いのではなかろうか。

9. 留年生へのアプローチ

大学生活の中で友達を持てない．ありのままの自分を出す場は，自宅の一室でしかない学生を連れ出すのは，登校拒否の子供を連れ出すのと同じ様に非常に時間のかかることかもしれない。しかし一応自我の確立された年代であるから，他大学の対応策が一方で勝手にと退学を早めさせることと，一方で懇切丁寧に教示することとの両面で巧を奏していることでわかるように，自我そのものより，表層部分の賞罰的な働きかけで軌道修正される場合もある。ただそれだけでは十分とはいえない，又元へ戻ることも考えられる。

深層部分での変格が起れば，自己実現への道程として留年が位置ずけされ，簡単に元に戻ることもないわけであるが，人数の多いところでは実際的に困難であろう。

教えるのではなく，自己を考える場を持つこと，友達同志が自分自身を出し合える場が必要なのだが，留年生同志を集めることは嫌われる。女性集団としての特徴かもしれないが相談室への呼び出しは歓迎されなかった。一般の人々と同じ立場でゆとりを持った話し合いの場が望ましく，特に1年次にそのような場が必要である。

高学年になった場合は1対1のアプローチの方がよい。あくまで友達同志のつき合い的基盤で，教える立場でない方がよい。

3年で留年したAさんの例で考えると，前期試験の受験を殆んど拒否してしまった時点でAさんの留年は確定していたが，後期は来たり来なかったり，留年して新学期に入っても同じ状態

で，下宿でロックを聞きなんとなく本を読んだりして毎日を過し，自分が一番落着いていられるのは，自室が片附き，洗濯物など家事がきちんと出来ている時だという。学校へ来ないことは全然苦にならず家の中でいくらでも時間を過せるという。面接の約束も何度も破られたが，まるっきり忘れてしまうのではなく，時々思い出したようにやって来る。特に自分から話をするというのでもない。だまって坐っている，話しかければ答えるが少しも話が発展しない。好きだという映画に誘ってみる。特別の会話が続いたわけではないが楽しそうで友達の様な気持で一諸に映画をみたり，気軽な会話だけの関係を暫く続けているうちに，面接も休むことが少なくなり，Aさんを学校につれ戻した様である。学校へ来れば来ることが又一つの習慣となる。心を打ち明ける程ではないが，ノートの貸借位出来る友達が出来たという。自己を見つめ自己実現の過程として留年を見られるようになるにはまだまだ時間がかかるであろうが，友達関係を作ることで，自分の行動の方向を多少修正しえたことは事実であり，友達関係の必要性がわかる。

10. まとめ

留年することは必しも悪いことではないが親に課せられる負担は大きいし，しないですめばこれにこしたことはない。留年を1度すると2度，3度と長期化の傾向が少しずつだが増加している。前もって注意出来る尺度があればと種々考えるが決定的なものはまだない。機械的操作である程度の抽出が出来ると思われる6つの要因のうち3項以上の該当者には面接の必要がある。その際家庭環境から父母の接し方，本人の要求水準の高さ，自己の認知の仕方を自覚させることにより，留年への道をかなり阻止することが出来ると思われる。何故なら全学生へのアンケート調査で，留年生への意識面での次の2つの特徴を見いだしたからである。

① 留年生の1つの特徴が“自己とは何かを考える一群である”という。考えること自体は若者であれば誰でも迷う時期もあるだろうが，その期間が長すぎ本来しなければならないことまで出来ない状態に落入ってしまう。理想像をいかに自己の中に定着させられるかどうかが，アパシーへの道へ行くか，一時的悩みの範囲ですむかの分かれ道となる。本学の学生の理想とする人物は「主体的な行動が出来，思いやりのある，能力があれば尚よい」という結果が出てきた。そして理想像は，友人，親，知人に求めていることが多い。非常に近い存在に理想を求めていることは，アイデンティの保護者として自己の中に定着させるには，まず自己の不全感を克服しなければならないという作業が加わるため，非常に時間がかかる結果となる。

② 一方核家族が増え，父親がやさしく母親が厳しい場合，母親により安定感を得父親により自立を教えられるというこれまでの家庭環境から逆転し，自立様式の変格をもたらすことになる。安定感を得る対象を母親から仲間集団に求めることが多くなり，友達の有無がアパシーの大きな分かれ道の1つとなる。